

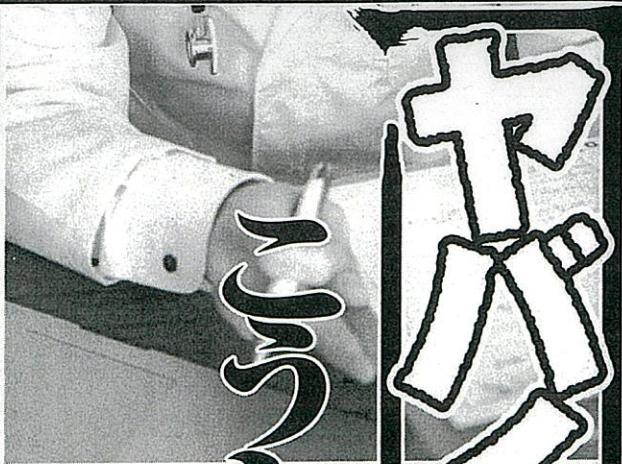
医師への不信感が
トラブルを引き起こす

過去最多を更新

「医療事故」と「裁判」に見舞われないために



統々と発覚する医療ミス



社)を上梓した、石

黒麻利子弁護士だ

(以下、カッコ内は全

て石黒氏のコメント)

。医療事故を専門

に扱う弁護士のは

から、医学博士の顔も

持つが、

「医療関係者の立場

から患者側の代理人

となつて、あまりの

風景の違いに愕然と

しました。医療紛争

というのはそれくら

い複雑で、外からは

見えづらい特殊な世

界だということです」

●「大丈夫ですよ」を連発

●セカンドオピニオンを許さない

●研修医に丸投げ

うして判斷するは医者

医療事故には過失を伴うもの、つまり明らかなミスがある場合のほか、やむを得ない合併症など、道義的な責任は認めるものの、法的な責任はないというものが、あるが、

「実際にミスがあるケースは1割程度で、残り9割は医師の説明不足など、コミュニケーション不足を生んだ、医師に対する不信感なんです」

例えば、目の前に危篤状態の患者がいたとしよう。もう助からないことは、医者から見れば一目瞭然だ。にもかかわらず、医師が患

危ない病院

危ない病院



医療事故は過去最多の件数に

大学病院をはじめとした医療機関による医療事故があとを絶たない。

昨年9月には水戸市の水

型心筋症の手術を受けた茨城県内の女性患者(69)が10倍の量の痛み止め薬を投与され、その後に死亡していたことが判明。病院は医療ミスを認め、遺族に謝罪したが、

「カテーテル手術を受けていた患者に対し、手術医が痛みを緩和する塩酸モルヒネの投与を看護師に指示する際『モルヒネ2・5』と伝えたところ、単位を勘違いした看護師が5ミリグラムを投与

してしまった。標準使用量は5~10ミリグラムで、医師ら8人も手術室にいたといいますが、誰一人、誤りに気がつかなかつたそうです」(全国紙社会部記者)

さらに11月には、愛知県の豊橋市民病院でも死亡事

故が露呈した。狭心症の男

性患者(当時65歳)を手術

した11年12月、医療器具の

一部であるワイヤー(直径0・36ミリ)を誤って切断。

先端約5ミリを冠動脈内に残

したことでの男性が転院先

心疾患に脳疾患。寒い冬の時期はとかく健康を脅かす危険がいっぱい。が、どうにか病院に駆け込めば安心かといふと、さにあらず。元気になるどころか、一部は魔窟の様相を呈し、医療トラブルでさらなる「被害」に巻き込まれることすらあるのだ。専門家が暴露する閑実態と、身を守る方法とは――。

した事実を認め、院長が謝罪。東大病院でも、15年に入院中だった男児に内服薬を取り違えて投与し、死亡させたことを公式サイトで公表している。

特定機能病院や大学病院など、事故の報告義務がある施設などを調査する公益財団法人「日本医療機能評価機構」の報告によれば、16年度の医療事故は全国1031の医療機関で、過去最多の3882件。うち

で4日後に、急性心筋梗塞のため死亡していたことを発表したのだ。名古屋大学病院では、ガ

ンを見過ごし、患者が死亡した事実を認め、院長が謝罪。東大病院でも、15年に入院中だった男児に内服薬を取り違えて投与し、死亡させたことを公式サイトで公表している。

特定機能病院や大学病院など、事故の報告義務がある施設などを調査する公益財団法人「日本医療機能評価機構」の報告によれば、16年度の医療事故は全国1031の医療機関で、過去最多の3882件。うち

が8割を占めている。

「ただ、この数字は報告義務のある医療機関276施設だけ。全国に約17万9000の医療施設があると考えると、これはあくまでも氷山の一角です」

そう語るのは昨年末、医療事故と医療裁判の知られる実態を描いた著書「医療事故に『遭わない』負けない」(扶桑出版社)。



医療の闇
石黒麻利子弁護士

